# 苦にならない句作

槌田満文

五年ほど前から、月に一回「八の会」という句会に出席するようになった。毎月第二土曜日の午後、銀座交詢社の一室に集まるメンバーは、かつて同じ新聞社に勤めていた旧友ばかり。すでに還暦や古稀を過ぎても、気分だけはいつまでも若い（つもりの）元ジャーナリストたちである。

文化部員だったのは私ひとり。あとは政治部、外報部、社会部などで活躍した連中だけに、雑談の話題は多岐にわたる。そのおしゃべりが愉しくて、句作は二の次の感じになることがないでもない。

発足してから二十年近い「八の会」は、句（九）になる一歩手前という、謙遜とも居直りともとれる意味で名付けられたらしい。欠員の補充に際しては全員の推薦が必要で、一人でも反対があれば入会できないことになっている。気のおけない仲間ばかりなので「句にならない」というより「苦にならない」句会といってよいだろう。

私は学生時代から俳句の鑑賞はずいぶんしてきたつもりだが、本気で実作を始めたのは「八の会」へ誘われたのがきっかけで、まだ初心者もいいところである。

かねてから、俳句は「一瞬の美」をとらえる言語芸術と考えてきたから、できるだけそうした句を作りたいと心がけているが、いわゆる「眼高手低」の徒であることはいうまでもない。

しかし、理窟ばかりこねていても始まらないので、お笑い草に拙作の一部をおおよそ作句順に並べてみよう。

木守柿朱く車窓をよぎりけり
釣り糸に吹く風見ゆる谿の秋
雲を出て月光雲に及びけり
メトロいま地上に出たり薫風裡
手の上着もてあましたる薄暑かな
遠花火すこし暴れて果てにけり
葉牡丹にことしの日ざし届きけり
寒林を赤く燃やして日の落つる
自転車のドミノ倒しや春嵐
老桜の洞に花びら吸はれけり
山茶花や落花が落花誘ふらし
風車とまりて色の戻りけり

駆け出せばあと追ひくるや小夕立
風立ちておのづから沸く蟬しぐれ
カーテンが身をひるがへす初あらし

調べてみたら、これまでいちばん多く作ったのは「夕茜」「夕映」の句だった。これも、たちまち消えてゆく自然現象のなかで、もっとも美しいものと感じているためかもしれない。

かぞへ日の空やしばしの夕茜
富士黒く寒夕映のなかにあり
寒がらす黒一点の夕茜
夕映を負ひて春富士むらさきに
花火待つ川面に残る夕茜

すぐ消えてしまうといえば、食べものの味にも共通する性格がある。食通ではないが、食べることが好きな点では人後に落ちないと思っているので、味覚をよんだ句も少なくない。

春愁や食べるに惜しき京和菓子
ほつこりと焼芋割りてこぼしけり
餡透けて曇る色よし葛ざくら
はりつけの鰻見るまに割かれけり
歯ごたへのほどよき味やとろろ蕎麦
艶めきて蜜を秘めたり冬林檎
あはや指するほどに山葵おろしけり
子の残す栗飯に栗なかりけり
妻の味きまりて久し雑煮膳
木の芽和え季節を舌に残しけり
そらまめを口にテレビの砂かぶり
父の歳近き思ひや冷奴

酒好きの父は八十一歳で没したが、私もだんだんその年齢に近づきつつある。大正十五年十二月生まれの私は、教え年が昭和の年号と一致していた。私にとって昭和史は「わが年代記」といってよく、平成になってからは「付録の人生」という気がしないでもない。

大学を出てからでも五十年に近くなった。出版社に三年、新聞社に二十年勤めたが、そのあとの大学教員の生活もこの三月で終わりを迎える。

作る句に遠く過ぎ去った時を惜しむ思いが色濃くにじみ出てもおかしいとはいえないだろうが、ただこれからも後ろ向きなだけの生き方はしたくないと思う。

豆まきや遠く過ぎにし年の数
竹馬や忘れ得ぬ名を忘れゐし
スキップの孫に後れて青き踏む
蝶生れ七十路びとの我に添ふ
朝寝して定年唯一の果報とす
紫陽花や変り変れる世を生きて
年の果て告げて「歓喜の歌」終る
過ぎし日はうつつか夢か年の逝く
とだえゐし友の賀状や無事とのみ
贈られし友の新著を読初に
芋焚けば少年の日のにほひ立つ
肯へぬ事多き世や冴返る
かへりみて七十路はるか春の塵
薫風や若き日にわが立ちし丘
白がすり古稀過ぎてなほ一書生

フランスの文人ポール・ヴァレリイは「人類はあとずさりして未来へはいってゆく」といった。

今後「あとずさりして未来へはいってゆく」私の残された生活が、はたしてちゃんとした句になるかどうかは、作ってみなければわからない。しかし、少なくともそうした句作が苦にならないように生きてゆきたいと考えている。